



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（XXX-XXXV）
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2014, 12, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105955
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムファッダリーヤート試訳 —(XXX) アブド・ヤグース・アルハーリシー—

عَبْدُ يَغُوثَ الْحَارِثِيُّ

池田 修*

まえがき

本名アブド・ヤグース・ブヌ・ワッカース・ブヌ・サラア (°Abd Yaghūth b. Waqqās b. Ṣalā'a)。ヤグース (Yaghūth)「支援者」は『コーラン』71章23節「彼らは互いに、みな、それぞれの神さまを捨てるでないぞ。ウッドさまも、スワーアさまも、ヤグースさまも……」のヤグースのことで、マズヒジュ (Madhhij) 部族連合軍の偶像神であった。その聖地はナジュラーンから6日行程のジュラシュ (Jurash) にあり、ライオン像であった。

アブド・ヤグースはアルハーリス・ブヌ・カアブ (al-Hārith b. Ka'b) の族長であった。この部族は一説ではマズヒジュという、ヤマン起源でカフターン (Qaḥṭān) より4代あとのマーリク・ブヌ・ウダド (Mālik b. °Udad) を祖とする有力な集団であった (マズヒジュはマーリクが生まれた丘の名との説もある)。彼らの本拠地はアッターイフの南、サラートの東に位置する肥沃なナジュラーンであった。一部の者はキリスト教徒になり、司教や牧師もいた。彼らは H9年 (AD630年) に預言者ムハンマドを訪問している。詩人はマズヒジュ連合軍を率いて、以下に紹介する第2次アルクラブ (al-Kulāb) の戦いに臨んだが、捕らえられ処刑された。この詩は処刑される直前に詠んだものである。

第2次アルクラブの戦いの概要は、次のとおりである。およそ AD611年頃、アルヤマンからペルシャの都マダーインに弓矢の材料を運ぶ隊商が、タミーム族に襲われ略奪されるという事件が起こった。そこで、ペルシャの皇帝はアルムシャッカルの総督に命じ、タミーム族に懲罰を加え、多数の者を殺した。このため、タミーム族と同盟していたアッリバーブ (al-Ribāb) はアルクラブというところに撤退した。アッリバーブはタミームの近縁部族——ダッバ、タイム、アディー、アウフ、サウル各部族の同盟集団であった。アルクラブはキダ (Qida) またはキッド (Qidda) とも呼ばれた、アルヤマーマにあった地名である。

タミーム族がこのように弱体化したことは、マズヒジュにとってはラクダや婦女子を略奪する好機となった。そこで、アブド・ヤグースは北ヤマンの南アラブ系の全部族を率いて進撃した。軍勢の規模はおよそ8,000名で、この戦いは、シウブ・ジャバラ (Shi'b Jabala)、ズー・カール (Dhū Qār) とともにジヤーヒリーヤ時代の3大戦

* 大阪外国語大学 名誉教授

争の1つとされている。

戦いは2日にわたり、初日はアンヌアマーン・ブヌ・ジサース (al-Nuʿmān b. Jisās) に率いられたアッリバーブ軍がよく防戦したが、初日が暮れる頃、アンヌアマーンが殺された (詩第9行)。2日目になると、アッリバーブ軍をカイス・ブヌ・アーシム (Qays b. ʿĀsim) が率い、北アラブのサアド族が加勢して優位に立ち、アルヤマン軍は支えきれず敗走した。

殿 (しんがり) にいた詩人は、タミーム系のサアド・ブヌ・ザイド・マナート一族の男に捕らえられた。彼は初日に殺されたアンヌアマーンがタイム族の族長であったため、タイム族に引き渡され復讐を受けることになった。タイム族は処刑に当たり、この有名な詩人に中傷されるのを恐れ、口を塞ごうとした (8行)。ところが、詩人が自部族を諷刺するだけだと約束したので、この詩を詠ませた。タイムが処刑に当たって希望をたずねると、貴人にふさわしい扱いを願い、自らを哀悼するためにブドウ酒を求めた。詩人がブドウ酒を飲み始めると、血管が切り裂かれた。詩人は弱りながら、この詩を詠んだとのことである。

なお、アルクラーブの戦いは第1次 (550年頃) もあるが、これはキンダ王国の王子サラマ (タグリブが支援) と同シュラフビル (バクルが支援) が北部のタグリブの地で争い、後者が敗れた戦いのことで、同じ地名であるが場所が第2次とは異なる (No.42, 23行参照)。

タウィール (*tawīl*) 調、20行。

(XXX) テキスト

وَقَالَ عَبْدُ يَعُوثَ بْنُ وَقَاصٍ الْحَارِثِيُّ

- 1- أَلَا لَا تَلُومَانِي كَفَى اللَّوْمَ مَا بَيَا
 - 2- أَلَمْ تَعْلَمَا أَنَّ الْمَلَامَةَ نَفَعُهَا
 - 3- فَيَا رَاكِبًا إِمَّا عَرَضْتَ فَبَلَّعَنْ
 - 4- أَبَا كَرْبٍ وَالْأَيْهَمَيْنِ كِلَيْهِمَا
 - 5- جَزَى اللَّهُ قَوْمِي بِالْكَلَابِ مَلَامَةً
 - 6- وَلَوْ شِئْتُ نَجَّيْتَنِي مِنَ الْخَيْلِ نَهْدَةً
 - 7- وَلَكِنِّي أَحْمَى ذِمَّارَ أَبِيكُمْ
 - 8- أَقُولُ وَقَدْ شَدُّوا لِسَانِي بِبِنْسَعَةٍ:
 - 9- أَمْعَشَرَ تَيْمٍ قَدْ مَلَكْتُهُمْ فَأَسْجَحُوا
 - 10- فَإِنْ تَقْتُلُونِي تَقْتُلُوا بِي سَيِّدًا
- وَمَا لَكُمْ فِي اللَّوْمِ خَيْرٌ وَلَا لِيَا
 قَلِيلٌ، وَمَا لَوْمِي أَخِي مِنْ شِمَالِيَا
 نَدَامَايَ مِنْ نَجْرَانَ أَنْ لَا تَلَاقِيَا
 وَقَيْسًا بِأَعْلَى حَضْرَمَوْتَ الْيَمَانِيَا
 صَرِيحَهُمْ وَالْآخِرِينَ الْمَوَالِيَا
 تَرَى خَلْفَهَا الْحَوْ الْجِيَادَ تَوَالِيَا
 وَكَانَ الرِّمَاحُ يَخْتَطِفُنَ الْمُحَامِيَا
 أَمْعَشَرَ تَيْمٍ أَطْلِفُوا عَنْ لِسَانِيَا
 فَإِنَّ أَخَاكُمْ لَمْ يَكُنْ مِنْ بَوَائِيَا
 وَإِنْ تُطْلِفُونِي تَحْزُونِي بِمَالِيَا

- ١١- أَحَقُّا عِبَادَ اللَّهِ أَنْ لَسْتُ سَامِعًا
 ١٢- وَتَضَحُّكَ مِنِّي شَيْخَةً عَبْشَمِيَّةً
 ١٣- وَظَلَّ نِسَاءَ الْحَيِّ حَوْلِي رُكَّدًا
 ١٤- وَقَدْ عَلِمْتُ عِرْسِي مُلَيْكَةً أَتْنِي
 ١٥- وَقَدْ كُنْتُ نَحَارَ الْجُزُورِ وَمُعْمِلَ الدِّ
 ١٦- وَأَنْحَرُ لِلشَّرْبِ الْكَرَامِ مَطِيَّتِي
 ١٧- وَكُنْتُ إِذَا مَا الْحَيْلُ شَمَّصَهَا الْقَنَا
 ١٨- وَعَادِيَّةٍ سَوْمَ الْجَرَادِ وَزَعَتْهَا
 ١٩- كَأَنِّي لَمْ أَرْكَبْ جَوَادًا وَلَمْ أَقُلْ
 ٢٠- وَلَمْ أَسْبِ الرِّقَّ الرَّوِّيَّ وَلَمْ أَقُلْ
 نَشِيدَ الرُّعَاءِ الْمُعْزِبِينَ الْمَتَالِيَا
 كَأَنْ لَمْ تَرَى قَبْلِي أَسِيرًا يَمَانِيَا
 يُرَاوِدُنْ مِنِّي مَا تُرِيدُ نِسَائِيَا
 أَنَا اللَّيْثُ مَعْدُوًّا عَلَى وَعَادِيَا
 مَطِيٍّ وَأَمْضَى حَيْثُ لَا حَيٍّ مَاضِيَا
 وَأَصْدَعُ بَيْنَ الْقَيْنَتَيْنِ رِدَائِيَا
 لَبِيقًا بِتَضْرِيْفِ الْقَنَاقَةِ بَنَانِيَا
 بِكَفِّي وَقَدْ أَنْحَا إِلَى الْعَوَالِيَا
 لِحَيْلِي كُرِّي نَفْسِي عَنْ رَجَالِيَا
 لِأَيْسَارِ صِدْقِي: أَعْظُمُوا ضَوْءَ نَارِيَا

(XXX) 訳

- 1- おお、お前たち兩名よ、私を責めるな。(捕らえられ) 苦境に置かれている私を責めるのは沢山だ。責めたとてお前たちにも、私にも、なんら益はない。
- 2- お前たちは非難しても殆ど益がないということを知らないのか。わが兄弟を責めるのは私の気質¹⁾にあわないのだ。
- 3- おお、騎士よ、アルアルドを訪ねたなら²⁾、ナジュラーンからきた私の酒友らに伝えてくれ、「君たちは(彼には)もはや会えないだろう」と。
- 4- すなわちアブー・カリブと(アルヤマンの)2人のアルアイハムと、アルヤマンのハドラマウトの高地に住むカイスらに³⁾。
- 5- 神がアルクラブで(私を見捨てて敗走した)我が部族を非難で報いますように。我が部族の軍勢と、同盟した他部族の混成軍をともに(叱責しますように)。
- 6- もし私がそのつもりなら、背の高い(私の)雌馬が、(安全なところへ)私を救い出していたら。その馬の後を暗緑色の馬がついていくのが見えただろう。
- 7- しかしながら、私は父祖の名誉を守る。槍は不退転の守り手の命を奪うものだ。

1) *shimāliya* 「私の気質」は *shamā'il-ī* のこと。

2) *araq-ta* は「アルアルドへ君が行く」の意。アルアルドはメッカ、メディナとその周辺、ときにアルヤマンも含まれると言われている。*rākib-an* 「騎者」は *yā rākibāh!* 「おお、悲しいかな、騎者よ」の省略形との説もある。

3) アブー・カリブ (°Abū Karib) とは、ビシュル・ブヌ・アルカマ・ブヌ・アルハリス (Bishr b. °Alqama b. al-Hārith) のこと。2人のアルアイハム (al-°Ayham) とは、アルアスワド・ブヌ・アルカマ・ブヌ・アルハリス(al-°Aswad b. °Alqama b. al-Hārith) とアブドルマシーフ・ブヌ・アルアブヤド (°Abd al-Masīh b. al-°Abyad) を指す。以上3名は、バヌー・アルハリス (Banū al-Hārith) の族長たちで、この部族の一部の者はキリスト教徒で、ユダヤ教徒の王ズー・ヌワース (Dhū Nuwās) に焼き殺されたと、『コーラン』85章4節にある。アルヤマンのカイス (Qays) とはキンダの族長で、ムハンマドに呼ばれてイスラームへの改宗を求められたアルアシュアス (al-°Ash°ath) の父。

- 8- 彼らは私の舌を皮紐で縛り、ものが言えないようにした。そこで私は、「タイム族の衆、自由にものが言えるようにしてくれ」と言つた⁴⁾。
- 9- タイム族の衆、あなた方は私を取り押さえた。丁重な扱いをしてくれ。あなた方の兄弟 (殺されたアンヌアマー・ブヌ・ジサース)⁵⁾は私と同等の人物ではない。
- 10- もしあなた方が私を殺すのであれば、族長にふさわしい名誉ある死を与えてくれ。また、もし私を解放するのであれば、私の財産をすべて取り上げてくれれば良い。
- 11- 神の僕 (しもべ) たちよ、出産したり、まだ出産していないラクダの群れを遠い牧場へ送る牧童らの歌声を、私がもはや聞くことはないというのはまことか⁶⁾。
- 12- アブドシャムス家の老女は、捕らえられた私を見て笑った。私より前に、アルヤマンの捕虜を見たことがないかのようにであった⁷⁾。
- 13- (タイム) 族の女たちは私の周りから動かず、私の妻女が望む罪業をねだり続けた。
- 14- 私の妻ムライカは、私が敵に攻められるときも、これを攻めるときも、ライオンであることを良く知っている。
- 15- 私は、しばしば、ラクダを屠殺して、客や貧者らをもてなし、また、ラクダに乗って、誰も行ったことのないところまで探索に出かけたものだ。
- 16- 私は大切な飲み友達らに、私のラクダを屠って、振舞ったこともあるし、二人の舞姫に私の外衣を、二つに裂いて与えたこともある。
- 17- 私は味方の騎馬隊が敵が繰り出す槍に驚いて、後退するとき指を器用に使って、その穂先を避けさせたものだ。
- 18- 私はイナゴの大群のような多数の敵が、槍の穂先をそろえて私に狙いをつけていたとき、自らの手でしばしば防いだものだ。
- 19- (今や囚われの身となった) 私は駿馬に乗ることもなく、我が騎馬武者らに「反撃せよ。歩兵らから敵を追っ払え」とも言えない者になったようだ。
- 20- また、ブドウ酒が一杯入った皮袋も買わなくなり、マイシル (賭け矢) ゲーム⁸⁾で

4) アルアンバーリーは、舌は皮紐では縛れないので、これは「丁重に扱ってくれ」の比喩的表現だと説く。すなわち「あなた方に感謝して褒めるから物を言わせてくれ」という意味だとするが、そうではなく中傷されるのを恐れて、猿轡のようなもので口を塞いだところでは解した。

5) *ʾakhā-kum*「あなた方の兄弟」とは、第2次クラブの戦いの初日、優勢に立ったりバープ同盟軍を率いたタイム族のアンヌアマー・ブヌ・ジサースを指す。彼のほうは勝っていたが、味方のサアド・ブヌ・ザイド・マナート族を主力とするカイス・ブヌ・アーシムが率いるタミーム軍は初日に負けそうになった。そこで、前記アンヌアマーが助けに行った。彼は体重が重く、馬が疲れたため、降りたところを、アブドアッラー・ブヌ・カアブ (*ʿAbd ʾAllāh b. Kaʿb*) という男に刺され戦死した。

6) これは詩人を捕らえているタイム族への問いかけであるが、*taym* は *ʿabd* (下僕) と同じ意味で、*Taym ʾAllāh*「アッラーの下僕」、*Taym ʾAllāt*「アッラートの下僕」などのように、神の名とともに呼ばれていた。それが時の経過とともに「神」の部分が省略されたもの。また、「ラクダで遠くの牧草地まで行く」とは、詩人の部族の威勢の盛んなことを表し、「そのような人物を殺すのか」との脅しが込められている。

7) 詩人を捕らえたのはウマル・ブヌ・アブドシャムス (*ʿUmar b. ʿAbd Shams*) 一家の勇敢な若者で、詩人を一族のいるところへ引立てて行った。立派な男だと見た若者の母が、「何者か?」と尋ねると、詩人は「族長だ」と答えた。すると、母は「勇敢な倅に捕まえられた族長を、神が辱めよ」と言って笑ったとある。なお、戦闘中、捕虜は縛られて、婦人に見張らせるのが慣わしであった。*lam tarā*「見なかった」は *lam tara* とすべきもの。

8) 「マイシル (*maysir*) ゲーム」についてはNo.9「まえがき」ほかで説明した。この「賭け矢ゲーム」で勝ちとったラクダの肉は勝者が食べるのではなく、貧者らに分け与える。そのためにかがり火を明るくして、彼ら呼び寄せるのである。

信頼の置ける仲間に、「かがり火をもっと燃え上がらせよ」と言えない者になったようだ。

— (XXXI) ズー・アルイスバウ・アルアドワーニー —

ذُو الْإِصْبَعِ الْعَدَوَانِيَّ

まえがき

この詩人については本詩集 No.29 ですでに紹介した。本詩の背景には彼の部族アドワーンの部族内闘争がからんでいるとされている。すなわち、詩人はこの部族内紛争が部族の分裂弱体化につながるとみて、互いに血債を支払うことで和解するように説得に当たったが、一部の者があくまで復讐にこだわり、説得することができなかった。『歌の書』(3, pp.2~11) にその経過の記述がある。この詩は詩人の父方の息子(従兄弟)のアムル(°Amr)への憎しみ、非難を詠んでいるが、説得に応じなかった一門への不満の表明と見られる。

アルアンバーリーはアブー・イクリマ(°Abū °Ikrima)が伝えたものとして18行(basīṭ 調)を挙げているが、彼以外の伝承者は36行に膨らませたものを伝えているとして、注の中で紹介している。『歌の書』(3, pp.9~10)では32行のものが記載されているが、順序の入れ替えが散見される。18行のほうがアルムファッダルによる元の詩と思われるので、それを訳出した。

(XXXI) テキスト

وَقَالَ ذُو الْإِصْبَعِ الْعَدَوَانِيَّ

- | | |
|--|---|
| ١- لِيْ أَبْنُ عَمٍّ عَلَى مَا كَانَ مِنْ خُلُقٍ | مُخْتَلَفٍ— إِنْ فَأَقْلَبِيهِ وَيَقْلِبْنِي |
| ٢- أَزْرَى بِنَا أَنْنَا شَالَتْ نَعَامَتُنَا | فَخَالَنِي دُونَهُ وَخَلَّتُهُ دُونِي |
| ٣- يَا عَمْرُو إِنْ لَا تَدْعُ شَتْمِي وَمَنْقَصَتِي | أَضْرِبْكَ حَيْثُ تَقُولُ الْهَامَةُ أَسْفُونِي |
| ٤- لَاهِ أَبْنِ عَمِّكَ لَا أَفْضَلْتَ فِي حَسَبٍ | عَنِّي، وَلَا أَنْتَ دِيَّانِي فَتَحْزُونِي |
| ٥- وَلَا تَقُوتْ عِيَالِي يَوْمَ مَسْغَبَةٍ | وَلَا بِنَفْسِكَ فِي الْعَزَاءِ تَكْفِينِي |
| ٦- إِنِّي لَعَمْرُكَ مَا بَابِي بِذِي غَلَقٍ | عَنِ الصَّدِيقِ وَلَا خَيْرِي بِمَمْنُونٍ |
| ٧- وَلَا لِسَانِي عَلَى الْأَذْنَى بِمَنْطَلِقٍ | بِالْفَاحِشَاتِ وَلَا فَتْكِي بِمَأْمُونٍ |
| ٨- عَفَّ يَوْمُوسٌ إِذَا مَا خِفْتُ مِنْ بَلَدٍ | هُونًا فَلَسْتُ بِوَقَافٍ عَلَى الْهُونِ |
| ٩- عَنِّي إِلَيْكَ فَمَا أُمِّي بِرَاعِيَةٍ | تَرْعَى الْمَخَاضَ، وَمَا رَأْيِي بِمَعْبُونٍ |
| ١٠- كُلُّ أَمْرِي رَاجِعٌ يَوْمًا لِشَيْمَتِهِ | وَإِنْ تَخَالَقَ أَخْلَاقًا إِلَى حِينٍ |
| ١١- إِنِّي أَبِيُّ أَبِيُّ ذُو مُحَاظَةٍ | وَأَبْنُ أَبِي أَبِيِّ مِنْ أَبِيِّينِ |

- ۱۲- وَأَنْتُمْ مَعْشَرٌ زَيْدٌ عَلَى مِائَةٍ
 ۱۳- فَإِنْ عَرَفْتُمْ سَبِيلَ الرُّشْدِ فَانْطَلِقُوا
 ۱۴- مَاذَا عَلَى وَإِنْ كُنْتُمْ ذَوِي كَرَمٍ
 ۱۵- لَوْ تَشْرَبُونَ دَمِي لَمْ يَزَوْ شَارِبُكُمْ
 ۱۶- اللَّهُ يَعْلَمُنِي وَاللَّهُ يَعْلَمُكُمْ
 ۱۷- قَدْ كُنْتُ أُوتِيكُمْ نُصْحِي وَأَمْنَحُكُمْ
 ۱۸- لَا يُخْرِجُ الْكَرْهُ مِنِّي غَيْرَ مَأْيِيَةٍ
- فَأَجْمِعُوا أَمْرَكُمْ كَلَّا فَكِيدُونِي
 وَإِنْ جَهِلْتُمْ سَبِيلَ الرُّشْدِ فَاتُونِي
 أَنْ لَا أُحِبَّكُمْ إِذْ لَمْ تُحِبُّونِي
 وَلَا دِمَاءُكُمْ جَمْعًا. تُرَوِّبُنِي
 وَاللَّهُ يَجْزِيكُمْ عَنِّي وَيَجْزِينِي
 وَدِّي عَلَى مُثَبَّتٍ فِي الصَّدْرِ مَكُونٍ
 وَلَا أَلَيْنُ لِمَنْ لَا يَبْتَغِي لِينِي

(XXXI) 訳

- 1- 私には私と性格が異なる従兄弟がいるが、私は彼を憎み、彼は私を増んでいる。
- 2- 我々が (わが部族が) 散り散りに分裂した¹⁾のが、互いに見くびるようになった所以である。彼は私を見下し、私は彼を見下した。
- 3- アムルよ、もし、お前が私をけなしたり、非難するのを止めないなら、ハーマ²⁾が「(復讐の血を) 飲ませよ」と鳴くところで、お前を切り倒すであろう。
- 4- 神に誓って、従兄弟よ、お前は家系において私より優れてはいない。お前は私を支配下において、指図するような者ではない³⁾。
- 5- 飢餓に苦しむ日にお前は私の家族に食べさせもしないし、困難に当たって命がけで私を守りもしない。
- 6- お前の命にかけて、私の家の扉には錠はかけられておらず、友人のために常に開かれている。また、私が授ける恩恵は断たれることはない。
- 7- また、私の舌は近い親族に非道なことは言わない。私が暴力に訴えるなどとは、信じられていない⁴⁾。
- 8- 私は他人の物を欲しがらないし、貪欲ではない。私はある土地 (の住民) が私を辱めると感じたなら、それに耐えることはできない。
- 9- 私のもとから去れ⁵⁾。私の母は出産間近の雌ラクダを世話する奴隷牧婦ではない (お前の母は奴隷牧婦だ)。また、私は (お前に騙されるような) 愚か者ではない。

1) *shālat na°āmatu-nā* は直訳すると、「我々の雌ダチョウは尾を良くあげる」となるが、「散り散りに分裂する」の比喩的表現。

2) ある男が殺され、その復讐が行われていないと、殺された男の墓から、ハーマ (*hāma*) と呼ばれる鳥が出てきて、*usqū-nī* 「私を殺した相手側に復讐して、その血を注いでくれ」と鳴き続けると言われていた。ハーマは梟のような鳥とされている。*hāma* には「頭」の意味もあり、「渴きが頭に生じる」と信じていたのであろう。

3) *lāhi* は *li llāhi* 「神のために」の省略形で、一種の誓約表現。ここで呼びかけているのは「お前の従兄弟」すなわち「詩人自身」であるが、次に *lā °afḍalta* 「お前は……優れていない」と、2人称に変化しているので、「従兄弟よ」と訳した。

4) *walā fatk-ī bi ma°mūn-ī* の *fatk* は「無分別、暴力、激昂」などの意味があり、「暴力に本気で訴えることはない」のか、場合によっては、「本気で暴力を振るうこともあるから、気をつけよ」と暗示しているのか、いずれかであろう。

5) *°ann-ī °ilay-ka* 「私のもとから去れ」は *°ilay-ka °ann-ī* ともいう。

- 10- 誰にせよ、本来でない人物らしく、しばらく演じたところで、何時の日か、生来の人物に戻るものだ。
- 11- 私は強情で、(お前のようなふしだらな男には) 屈服せず、あくまで名誉を守る。私は穢れない父祖の血を引く強情で屈服しない者の子だ。
- 12- お前たちの一族は100余名である。皆で事を決断して⁶⁾、私を出し抜いてみよ (とても出来ないだろう)。
- 13- もしお前たちが正しい道を知ったなら、真っ直ぐ進め。だが、もし正しい道が分からなければ、私を訪ねよ (教えてやろう)。
- 14- お前たちが、たとえ由緒ある者であっても、私を愛していないので、私がお前たちを愛さないのに、何の不都合があらうか。
- 15- お前たちが私の血を飲んでも、飲み手は癒されないであらう。お前たちすべての血も私の渴きを癒すことはない。
- 16- 神は、私のこともお前たちのことも良く知り給う。神は、私のことでお前たちに報い、お前たちのことで私に報い給う。
- 17- 私はお前たちに助言し、お前たちの胸の中に隠されている揺るぎない憎悪の念にもかかわらず、友情を示してきた。
- 18- 私に無理強いしても拒絶するだけだ。柔軟さを望まない者に対して、私が柔軟に接することはない。

6) *fa ʿajmi-ū ʿamra-kum* 「お前たちは事を決断せよ」。『コーラン』10章71節に同じ表現がある。

— (XXXII) アルハーリス・ブヌ・ワアラ・アルジャルミー —

الْحَارِثُ بْنُ وَعَلَةَ الْجَزْمِيِّ

まえがき

本名アルハーリス・ブヌ・ワアラ・ブヌ・アブドアッラー (al-Ḥārith b. Waʿla b. ʿAbd ʿAllāh)。アルアンバーリーは、アルアスマイーが「この詩をアブー・アムル・ブヌ・アルアラーウ (ʿAbū ʿAmr b. al-ʿAlāʾ) が、この詩人の作として私に読み聞かせた」と述べているが、他の多くの口伝家は彼の父ワアラの作であるとしている。

この詩は第2次クラブの戦いにかかわるもので、アルアンバーリー自身、この戦いに参加したのは父のほうである (『注釈書』p.327) としている。『歌の書』(19, p.141) でも、父の詩として挙げている。ただし、父も息子もクダーア族 (南アラブ) の騎士兼詩人であった。ジャルムはクダーアの支族で、サラート・アルヤマン (Sarāt al-Yaman) の東部に住んでいた。

第2次クラブの戦い (本詩集、No.30「まえがき」参照) の際、ワアラはマズヒジュ連合軍に加わり、旗手を務めていた。戦闘が2日目に入り、マズヒジュとタミーム両軍が対峙したとき、まずタミーム側が「おお、サアド!」と叫ぶと、マズヒジュ陣営からも「おお、サアド!」の叫び声があがった。両軍とも「サアド」という兵が味方にいたのである。次にタミーム軍が「おお、カアブ!」と叫ぶと、マズヒジュ軍も「おお、カアブ!」と叫んだ。両軍に同名の兵がいたからである。

やがてタミーム軍を率いていたカイス・ブヌ・アーシムが、「おお、ムカーイスー門よ!」と呼ばわると、マズヒジュ軍はこれに対応できなかった。ムカーイス (Muqāʿis) の本名は、アルハーリス・ブヌ・アムル・ブヌ・カアブ・ブヌ・サアド (al-Ḥārith b. ʿAmr b. Kaʿb b. Saʿd)。ワアラはこれを凶兆とみて、戦旗を投げ出して逃げ、マズヒジュ軍は総崩れとなって敗走した。タミーム連合軍のサアド族やアッリバーブがこれを追撃した。

ワアラは馬に乗って逃げたが、馬が疲れると徒歩になり、また馬に乗り、ついで徒歩となり、ついに逃げおおせた。途中で、サリート・ブヌ・カタブ (Salīṭ b. Qatab) というナフド (Nahd) 族の男が馬に乗って敗走してきたのに出会い、その背に一緒に乗せてくれと頼んだが断られた。このサリートなる男は追撃軍に殺されたが、ワアラは逃げのびた。

この詩はタウイール (*tawīl*) 調、11行といたって短いものであるが、無事の敗走を自慢しているところが面白い。なお、馬に乗せてくれと頼んだのは、サリートのほうであったとの言い伝えもあるが、本詩の内容と矛盾するものである。また、アブー・タンマームによる『ハマーサ詩集』には、アル・ハーリス・ブヌ・ワアラ・ブヌ・アルムジャーリド (al-Ḥārith b. Waʿla b. al-Mujālid) という詩人がいて、古来よく混同されているが、彼はシャイバーン族出自の別人である。

(XXXII) テキスト

وَقَالَ الْحَارِثُ بْنُ وَعْلَةَ الْجَرْمِيُّ

- 1- فِدَى لَكُمَا رَجُلَى أُمِّى وَخَالَتَى
 2- نَجَوْتُ نَجَاءً لَمْ يَرِ النَّاسُ مِثْلَهُ
 3- حُدَارِيَّةٌ سَفْعَاءُ لَبَدَ رِيشَهَا
 4- كَأَنَّا وَقَدْ خَالَتْ حُدُنُهُ دُونَنَا
 5- فَمَنْ يَكُ يَرْجُو فِي تَمِيمٍ هَوَادَةً
 6- وَلَمَّا سَمِعْتُ الْخَيْلَ تَدْعُو مُقَاعِسًا
 7- فَإِنْ أَسْتَطِيعَ لَا تَلْتَمِسُ بِي مُقَاعِسٌ
 8- وَلَا تَكُ لِي حَدَادَةٌ مُضَرِّيَّةٌ
 9- يَقُولُ لِي النَّهْدِيُّ إِنَّكَ مُرْدَفِي
 10- يُذَكِّرُنِي بِالرَّحِمِ بَيْنِي وَبَيْنَهُ
 11- وَلَمَّا رَأَيْتُ الْخَيْلَ تَتْرَى أَتَائِجًا
- غَدَاةَ الْكِلَابِ إِذْ تُحَزُّ الدَّوَابِرُ
 كَأَنِّي عُقَابٌ عِنْدَ تَيْمَنٍ كَاسِرُ
 مِنَ الطَّلِّ يَوْمَ ذُو أَهَاضِيبٍ مَاطِرُ
 نَعَامٌ تَلَاهُ فَـارِسٌ مُتَوَاتِرُ
 فَلَيْسَ لِحَجْرٍ فِي تَمِيمٍ أَوَاصِرُ
 تَطَالَعْنِي مِنْ ثُغْرَةِ النَّحْرِ جَائِرُ
 وَلَا يَرْنِي مَبْدَاهُمُ وَالْمَحَاضِرُ
 إِذَا مَا عَدَتْ قُوتَ الْعِيَالِ ثَبَادِرُ
 وَكَيْفَ رَدَافُ الْقَلِّ أُمْلُكَ عَابِرُ
 وَقَدْ كَانَ فِي نَهْدٍ وَجْرٍ تَدَابِرُ
 عَلِمْتُ بِأَنَّ الْيَوْمَ أَحْمَسُ فَاجِرُ

(XXXII) 訳

- 1- アルクラブの戦い¹⁾の日の朝、わが母および叔母のお2人に私の両足を捧げたいものよ。あの日、我々は根絶やしにされるところであった。
 2- 私は誰も見たことのないような敗走をやつてのけた。私はまさにタイマン山で、翼をたたんで獲物に向かって急降下する鷲のようであった。
 3- 赤味がかった黒鷲の翼は、豪雨が降った日、露でぬれていた²⁾。
 4- 既にフズンナ³⁾の地が敵とわれらを隔てていたが、まるで、われらは、騎士に追われ、互いにつながって逃げるダチョウのようであった。
 5- 一体、誰がタミーム族に寛容さを望むことであろう。我がジャルム族をタミーム族に結びつけるなんらの友好的絆がないからである。
 6- 私は、敵の騎馬隊が「ムカーイス」⁴⁾と呼びかけるのを聞いたとき、恐怖の熱気が

1) アルクラブの戦いは第2次のもので、612年頃起こった。No.30「まえがき」参照。

2) この1行は、サラマの詩 (No.5, 9行、本誌第8号9頁) とよく似ている：「彼の馬は土砂降りの日に、雨水が羽根を濡らしたしなやかな翼を持つ黒ワシのようであった」。「tall (露)」と「豪雨」の取り合わせは矛盾しているようだが、前者は雨水の事かも知れない。

3) 「フズンナ(Hudhunna)」はアーミル・ブヌ・サアサア族の土地。

4) 「ムカーイス (Muqā'is)」はアルハーリス族のことで、タミームを率いたカイス・ブヌ・アーシ

喉もとに込み上げてくるのを感じた。

- 7- 私がうまく立ち回って逃げれば、ムカーイスは私に追いつき (私を捕らえることは) できないだろう。また、タミームの砂漠に住む者も村に住む者も、私を見つけだせないだろう。
- 8- 私は、ムダルムダルの女看守に見張られる⁵⁾ ようにはならない。彼女は、朝になると (私など捨て置いて) 急ぎ子らに食べさせる。
- 9- ナフド族の男が私に「馬の背のあなたの後ろに乗せてくれ」と言った。私は「敗者を背に乗せるなどできぬ。お前のおふくろは (倅のために) 泣けばよいのだ」と答えた⁶⁾。
- 10- 彼は我らの間の深い血縁を思い起こさせたが、すでに彼のナフドとわがジャルムは対立していたのである⁷⁾。
- 11- 私は、敵の騎馬隊が群れをなして次々と襲いかかってくるのを見たとき、今日は悲惨な激戦になるのが分かった⁸⁾。

ムもこの一族であった。アルハーリスが何かの誓約を「取りやめた (*taqā'asa*)」ので、「ムカーイス *muqā'is* (誓いを取り消した者)」と呼ばれるようになったと言われている。

- 5) 本詩集 No.30, 12行の「老女が捕虜を見張る」表現と符合する。血統を辿ると、ムダルはマアッド系の血につながり、タミームの祖先に当たる。
- 6) この1行は「まえがき」に言及した言い伝えと矛盾している。詩人のほうが馬が弱ったか何かの理由で、徒歩のときに「乗せてくれ」と頼んだというのが妥当であろう。
- 7) ナフドとジャルムはともにヤマン系の雄族クダーアにつながり、アルヤマンの北のサラートおよびその東方に住み、マズヒジュ同盟に参加していたが、双方とも勢力が増して対立するにいたり、ナフドはアルハーリス・ブヌ・カアブ (*al-Hārith b. Ka'b*) と、ジャルムはズバイド (*Zubayd*) とそれぞれ同盟し、睨み合っていた。
- 8) この1行は2行目に配置されるべきである。*tatrā* は *natrā* が転訛したもので、ここでは主動詞の付帯状況を表す *hāl*、語根は √W-T-R。敵の騎兵隊が次々と襲ってくる状態を表している。

— (XXXIII) ジュバイハーウ・アルアシュジャイー —

جُبَيْهَاءُ الْأَشْجَعِيِّ

まえがき

本名ヤジード・ブヌ・ハミーマ・ブヌ・ウバイド (Yazaïd b. Ḥamīma b. ʿUbayd)。 「ジュバイハーウ」は彼の渾名で、「額が見事な者」、または「ライオン」などの意味がある。

この詩人はウマイヤ朝期に生まれ、没している。彼はヒジャーズでベドウィンとして過ごし、イスラームの征服戦には参加しなかった。カリフ宮殿や有力者を訪ねて、頌詩を詠むようなこともしていない。

『歌の書』(16, pp.146~147) には、同時代の有名な詩人であるアルファラズダクがバスラのミルバド (またはメディナ) でこの詩人に会い、その詩才を褒めたという逸話が載っている。彼の属したアルアシュジャウという部族は、ガタファーン系であったが、同系統のアブスやズブヤーンほど有力な部族ではなかった。

アルアンバーリーは、この詩は文法学者サアラブ (Thaʿlab, 815~904) がアブー・アブド・アッラー・ブヌ・アルアアラービー (ʿAbū ʿAbd ʿAllāh b. al-ʿAʿrābī) から伝えられたものとしている。これはアルムファッダルが選んだ詩ではなく、他のラーウィーたちが本詩集に組み入れたことを暗示していると思われる。

詩人はタイム・ブヌ・ムアーウィヤ (Taym b. Muʿāwiya b. Salīm b. ʿAshjaʿ) 一門のそばに住んでいた。一門の庇護民の1人が詩人に雌ヤギを貸してくれと頼み、詩人がこれに応じて、乳が良く出る雌ヤギを貸してやった。しかし、相手が何時までたってもこれを返さないで、返却を求め、このヤギの詳細を詠んだものである。

1行目に *maniḥa* という語が使われているが、もともとこれは「ミルク不足の者を助けるために貸してやる雌ラクダ」を指して用いられた。この詩ではラクダの代わりにヤギとなっている。この語はその後多用され、ついには贈り物の意味に用いられるに至った。

タウイール (*tawīl*) 調、12行。

(XXXIII) テキスト

وَقَالَ جُبَيْهَاءُ الْأَشْجَعِيُّ

- ١- أَمْوَالِي بَنِي تَيْمٍ أَلَسْتُ مُؤَدِّيَا مَنِحَتَنَا فِيمَا تُؤَدِّي الْمَنَاحُ
٢- فَإِنَّكَ إِنْ أَدَيْتَ غَمْرَةَ لَمْ تَزَلْ بَعْلِيَاءَ عِنْدِي مَا بَعَى الرَّبْعُ رَابِعُ
٣- لَهَا شَعْرٌ ضَافٍ وَحِيدٌ مُقْلَصٌ وَجِسْمٌ زُخَارِيُّ وَضُرْسٌ مُجَالِحُ

- ٤- وَلَوْ أَشْلَيْتَ فِي لَيْلٍ رَجَبِيَّةٍ
 ٥- لَجَاءَتْ أَمَامَ الْحَالِيَيْنِ وَضَرَعُهَا
 ٦- وَوَيْلُمَّهَا كَانَتْ غُبُوقَةَ طَارِقٍ
 ٧- كَأَنَّ أَجِيجَ النَّارِ إِزْزَامُ شُحْبِهَا
 ٨- وَلَوْ أَتَّهَّا طَافَتْ بِظَنْبٍ مُعْجَمٍ
 ٩- لَجَاءَتْ كَأَنَّ الْقُسُورَ الْجَوْنَ بَجَّهَا
 ١٠- تَرَى تَحْتَهَا عَسَّ النَّضَارِ مُنَيِّقًا
 ١١- سَدِيسًا مِنَ الشُّعْرِ الْعِرَابِ كَأَنَّهَا
 ١٢- رَعَتْ عُشْبَ الْجَوْلَانِ ثُمَّ تَصَيَّفَتْ
- بِأَرْوَاقِهَا هَطْلٌ مِنَ الْمَاءِ صَافِحُ
 أَمَامَ صِفَافِيَّهَا مُبْدُ مُكََاوِحُ
 تَرَامَى بِهِ بِيْدُ الْإِكَامِ الْقَرَاوِحُ
 إِذَا أَمْتَاَحَهَا فِي مِحْلَبِ الْحَيِّ مَائِحُ
 نَفَى الرِّقَّ عَنْهُ جَدْبُهُ فَهُوَ كَالِحُ
 عَسَالِيَجُهُ وَالثَّامِرُ الْمُتَنَـاَوِحُ
 سَمَا فَوْقَهُ مِنْ بَارِدِ الْعُزْرِ طَامِحُ
 مُوَكَّرَةٌ مِنْ دُهِمِ حَوْرَانَ صَافِحُ
 وَضِيَعَةٌ جَلَسَ فِيهِ بَدَاءُ رَاجِحُ

(XXXIII) 訳

- 1- タイム族のマウラーよ、お前に貸してやった我らの雌ヤギを返さないのか。貸した雌ヤギ (雌ラクダ) は返されるべきものだ。
- 2- もしお前がガムラ¹⁾を返してくれたなら、取り引きするものが利益を望む限り、私はお前の律儀さゆえに、その名誉に報い続けるであろう。
- 3- 雌ヤギは長い髪に覆われ、首は高く伸び、体ははちきれないように太り、木の皮をはぐ臼歯を備えている²⁾。
- 4- 雌ヤギは雨が降る冬の夜に、乳を搾るために呼ばれると³⁾、——その夜、雨雲が垂れ込め、豪雨が降り注いでいたが——
- 5- 直ちに搾乳する2人の前にやってきた。すでにヤギの乳房は後ろ足の両股より、前に突き出ている、歩くと両足に当たっていた。
- 6- まことに驚くべき雌ヤギである。丘陵の危険な砂漠や、不毛の荒野をさまよう夜の訪問者の渴きを癒すのに、このヤギの乳は十分な夜の飲み物となる。
- 7- 部族のミルクを入れる容器に搾乳人が乳房を手で搾って乳を流れ落とす音は、まるで炎が弾けてぱちぱちと音を立てているようだ。
- 8- たとえ厳しい旱魃で若葉が出ないときに、ラクダが何回もかじった木の根元をこのヤギがめぐると、
- 9- まるで濃い緑のカスワルの若くて柔らかな葉や、たわわに実をつけた枝で、満腹したような姿でやってくる (多量の乳を出す)⁴⁾。

1) 「ガムラ (Ghamra)」はヤギの名。「サアダ (Sa'ada)」との言い伝えもある。

2) 冬季、木の皮を食べて乳を出したことを暗示している。

3) 「冬の夜」を「ラジャブ (rajab) の夜」としている。寒くて雨が降る冬の月を「ラジャブ月」とする過去の習慣が、詩語として残っていたことを示している。No.22, 6行目 参照。なお、寒い冬には乳の出が少なくなるが、このヤギは例外だとしている。

4) 「粗末なものしか食べなくてもミルクを多く出す」と言っている。「カスワル (qaswar)」はミモザの一種で、柔らかな枝を持ち、家畜が食べるとよく太り、乳を多く出すと言われている。

- 10- 雌ヤギの下には、ニダール⁵⁾の木で作られた大きな椀が置かれているのを、あなたは見るであらう。そこには冷たいミルクが溢れんばかりに満ちていて、泡が立っている。
- 11- 6歳のアラブの純血種の雌ヤギで、ふさふさとした豊かな白毛で覆われていて、乳房が張っている。まるで、ハウラーン⁶⁾の水槽がこのヤギに向かってつぎ込まれ乳房が張ったようである。
- 12- 雌ヤギはアルジャウラーンの草を食べ、ついで、夏にはジャルス (荒地) のワディーア (草) を食べ、両足の間が開き、重々しい⁷⁾。

5) 「ニダール (*niḍār*)」は堅い木で、椀などの容器が作られた。

6) 「ハウラーン (*Hawrān*)」はダマスクス地方の村で、水が豊富なことで知られていた。*duhm* は「黒いラクダ」の意味でよく用いられるが、解説に従い「水槽」と訳した。*ṣāfiḥ* は「子を失い、乳がかれて太った」の意味であるが、今ひとつは「買い手を騙すために、数日乳を搾らず、乳房が張ったラクダ」の意味がある。ここでは後者の意味のようだ。

7) 「ジャルス (*jals*)」と「ワディーア (*wadī'a*)」は固有名詞かも知れない。11、12行は2行目の後に配置すべきものと思われる。

—(XXXIV) シャビーブ・ブヌ・アルバルサーウ—

شَبِيبُ بْنُ الْبَرْصَاءِ

まえがき

本名はシャビーブ・ブヌ・ヤジード・ブヌ・ジャムラ (Shabīb b. Yazīd b. Jamra) で、「アルバルサーウ (ハンセン氏病患者 al-Barsāʾ)」は母の渾名。彼女の名はキルサーファ (Qirṣāfa)、またはウマーマ (ʿUmāma)で、アルハーリス・ブヌ・アウフ・ブヌ・アビー・ハーリサ (al-Hārith b. ʿAwf b. Abī Hāritha) の娘であった。

この詩人はウマイヤ朝第5代カリフ、アブデルマリク・ブヌ・マルワーン (在位 685~705年) 時代の人である。彼の父ヤジードはムッラ族の支族長であつた。母ウマーマは「アルバルサーウ (ハンセン氏病患者)」と呼ばれたが、事實は彼女がこの病気に罹っていたのではなく、目も眩むばかりの白い肌をしていたからだと言われている (『歌の書』 11, p.93)。『歌の書』では、母の別名として「キルサーファ」を挙げているが、アルアンバーリーはこれを詩人の母の名であるとしている。

カイロ版によると、預言者がアルバルサーウの父に彼女との結婚を申し入れたが、父は娘がハンセン氏病であるという口実を設けて断った。ところが帰って見ると、娘はこの病気にかかっていたという奇妙な逸話が載っている。それによれば、父は彼女を従兄弟のヤジードと結婚させ、その結果シャビーブが生まれ、シャビーブは「ハンセン氏病女の息子 (ʾIbn al-Barṣāʾ)」と呼ばれるようになったとのことである。

シャビーブはタイイ族との戦いで片目を失った。何かの請願をするか、褒美を受け取る機会でもない限り、詩人はカリフ宮殿には近寄らず、ベドウインとして暮らした。

この詩は、詩人が南に旅する恋人ヒンドとは逆に、北のシリアをめざして旅する道中で詠んだものらしい。弱者に対する詩人の気前よさを自慢している。

タウイール (tawīl) 調、23行。

(XXXIV) テキスト

وَقَالَ شَبِيبُ بْنُ الْبَرْصَاءِ

- | | |
|---|---|
| نَوَى يَوْمَ صَحْرَاءِ الْعَمِيمِ لَجُوجُ | ١- أَلَمْ تَرَ أَنَّ الْحَيَّ فَرَّقَ بَيْنَهُمْ |
| لَنَا طَرَبًا، إِنَّ الْخُطُوبَ تَهِيْجُ | ٢- نَوَى شَطَنْتَهُمْ عَنْ نَوَانَا وَهَيَّجَتْ |
| مَعَ الصُّبْحِ أَحْقَاضُ لَهُمْ وَخُدُوجُ | ٣- فَلَمْ تَذْرِفِ الْعَيْنَانِ حَتَّى تَحْمَلَتْ |
| يَمَانِيَّةٌ تَزْهَى الرَّغَامَ دُرُوجُ | ٤- وَحَتَّى رَأَيْتُ الْحَيَّ تَذْرِى عِرَاصَهُمْ |

- ٥- فَأَصْبَحَ مَسْرُورٌ بَيْنِيْكَ مُعْجَبٌ
 ٦- فَإِنْ تَكُ هِنْدٌ جَنَّةٌ حِيلَ دُونَهَا
 ٧- إِذَا اخْتَلَّتِ الرِّثَقَاءُ هِنْدٌ مُّقِيْمَةً
 ٨- وَبُدِلَتْ أَرْضَ الشَّيْخِ مِنْهَا وَبُدِلَتْ
 ٩- وَأَعْرَضَ مِنْ حَوْرَانَ وَالْفَنُّ دُونَهَا
 ١٠- فَلَا وَصَلَ إِلَّا أَنْ تُقَرَّبَ بَيْنَنَا
 ١١- وَمُخْلِفَةٌ أَنْيَابَهَا جَدَلِيَّةٌ
 ١٢- لَهَا رَبَذَاتٌ بِالنَّجَافِ كَأَنَّهَا
 ١٣- إِذَا هَبَطَتْ أَرْضًا عَزَازًا تَحَامَلَتْ
 ١٤- وَمُعْبَرَةٌ الْآفَاقِ يَجْرِي سَرَابُهَا
 ١٥- قَطَعْتُ إِذَا الْأَرْضَى ارْتَدَى فِي ظِلَالِهِ
 ١٦- لَعَمْرُؤُ ابْنَةِ الْمُرَيِّ مَا أَنَا بِالَّذِي
 ١٧- وَقَدْ عَلِمْتُ أُمُّ الصَّبِيِّينِ أَنِّي
 ١٨- وَإِنِّي لِأُغْلَى اللَّحْمِ نِيًّا وَإِنِّي
 ١٩- إِذَا الْمُرْضِعُ الْعَوْجَاءُ بِاللَّيْلِ عَزَّمَا
 ٢٠- إِذَا مَا ابْتَعَى الْأَصْيَافُ مَنْ يَبْدُلُ الْقِرَى
 ٢١- جُمَالِيَّةٌ بِالسَّبْفِ مِنْ عَظَمِ سَاقِهَا
 ٢٢- كَأَنَّ رِحَالَ الْمَيْسِ فِي كُلِّ مَوْقِفٍ
 ٢٣- وَمَا غَاضَ مِنْ شَيْءٍ فَإِنَّ سَمَاحَتِي
- وَبَاكِ لَهُ عِنْدَ الدِّيَارِ نَشِيْجٌ
 فَقَدْ يَعْرِفُ الْيَاسُ الْفَتَى فَيَعِيْجُ
 وَقَدْ حَانَ مِنْنِي مِنْ دِمَشْقَ بُرُوجُ
 تِلَاعَ الْمَطَالِي سَحْبَرٌ وَوَشِيْجُ
 تِلَالٌ وَخَلَالَتْ لَهُنَّ أَحْيِجُ
 فَلَايُصُ يَجْذِبُنِ الْمَثَانِي عُوجُ
 تَشْدُ حَشَاهَا نِسْعَةً وَنَسِيْجُ
 دَعَائِمُ أَرْزُ بَيْنَهُنَّ فُرُوجُ
 مَنَاسِمُ مِنْهَا رَاعِفٌ وَشَجِيْجُ
 عَلَى أَكْمِهَاقِبَلِ الضَّحَى فَيُمُوجُ
 جَوَازِي يَرَعَيْنِ الْفَلَاةَ دُمُوجُ
 لَهُ أَنْ تُنَوِّبَ النَّائِبَاتُ ضَحِيْجُ
 إِلَى الضَّيْفِ قَوَامُ السِّنَاتِ خُرُوجُ
 لَمَمْنُ يُهِيئُ اللَّحْمَ وَهُوَ نَضِيْجُ
 عَلَى ثَذِيْهَا ذُو وَدَعَتَيْنِ لَهُوجُ
 قَرَّتْ لِي مَقَلَاتُ الشِّتَاءِ خَدُوجُ
 دَمٌ جَاسِدٌ لَمْ أَجْلُهُ وَسُحُوجُ
 عَلَيْهَا بِأَجَوَازِ الْفَلَاةِ سُرُوجُ
 وَوَجْهِي بِهِ أُمُّ الصَّبِيِّ بَلِيْجُ

(XXXIV) 訳

- 1- アルガミームの砂漠で旅立った日、引き続いた部族の旅も、目的地を異にすることになったのを、あなたは見なかったか (見ただろう)¹⁾。
 2- 彼らの目的地は我らのそれと遥かに離れており、我らの不安を掻き立てる。まことに、数々の出来事が心を乱すものである。
 3- (私の) 両目から涙が流れるまもなく、朝になると、彼らの家財道具がラクダに積み込まれ、婦人用の乗り籠も乗せられた。
 4- 私はまた、部族の住まいの広場を強い南風が吹きすさび、土埃りを高く舞い上げる

1) 「アルガミーム (al-Ghamīm)」は al-Ghubayr, al-Ghumayr, al-Ghubar, al-Ghumaym などともいわれているが、地名というほかは不明。ヒンドはアーミル・ブヌ・サアサア族の拠点アッランカー (al-Ranqā) から南に向かい、詩人は北のダマスクスを目指したといっている。

のを見た。

- 5- その朝、ある者は貴女 (あなた) との別れを喜び、有頂天になっていたが、住まいに身を寄せて、声を押し殺して泣く者もいた²⁾。
- 6- もしも、ヒンドが垣根に囲まれた庭である (他人が入れない) なら、男は絶望に支配されながらも納得するのだが³⁾。
- 7- ヒンドがアッランカーウを住まう土地として落ち着いたとすれば、私はダマスクスの町 (塔) が見えてくる頃合を迎えている。
- 8- 私は彼女の代わりに、ヨモギの生えている土地を与えられ、彼女は (私の代わりに) アルマターリーの溪谷、すなわち、サフバルとワシージュの地を与えられた⁴⁾。
- 9- 彼女と私の間を、ハウラーンとアルクンヌ山⁵⁾の尾根と燃えるような熱い砂地が隔てていた。
- 10- ゆえに、彼女に会える術 (すべ) はただ1つ。すなわち、若くて俊足で、よく引き締まった雌ラクダが手綱を引いて、私を彼女に近づけてくれることである。
- 11- 雌ラクダの歯は出揃って1年経っており、(アルヤマンの) ジャディーラ産である。腹は皮紐と布帯で締められている⁶⁾。
- 12- 雌ラクダの四肢は軽快で、レバノン杉の支柱のようで、四肢の間隔も広い。
- 13- 雌ラクダは、固くてごつごつした土地に移ると、足から血を出したり切り裂かれたりしながら、よくこれに耐えて進む。
- 14- (乾ききって) 土埃が舞い上がる多くの砂漠において、昼前になると、丘の上に蜃気楼が現れて波打つ。
- 15- 私はその砂漠を横断したが、ちょうど荒野の草を食べた野生の牛がアルター⁷⁾の木陰で身を包み、巣穴に入る頃であった。
- 16- ムッラ族の娘に誓って言うが、私は時世の転変に襲われるとき、悲鳴を上げるような男ではない⁸⁾。
- 17- 幼子2人の母は、私がまどろんでいるときでも、夜の訪問者があれば起きて、外に出て客を招き入れる者であることを知っている。
- 18- 私は (早魃のときには占い矢用に、よく太ったラクダの) 生肉を高値で買い (貧者ら

2) *bayni-ki, bayni-ka* いずれにも読めるが、前者なら代名詞は詩人の恋人ヒンドを指し、後者なら詩人に恋敵がいたことを暗示している。

3) *hīla dūna-hā* 「垣根に取り囲まれ、他人が入れない」。5行目の暗示と関係するのかも知れない。

4) 「ヨモギの生えている土地」とは「砂漠」のこと。*sakhbar* 「イグサ」、*washij* 「竹」は、ここでは「アルマターリー (al-Maṭālī) 溪谷」の地名とされている。つまり、「私は砂漠に住み、彼女は水が豊かな地に住むようになった」といっている。

5) 「ハウラーン (Hawrān)」は No.33, 11行でも、「水に恵まれた肥沃な土地」と説明されている。「アルクンヌ (al-Qunn)」はタイイ族の山、ジャバル・シャンマルの頂上。

6) ラクダの歯が出揃うのは生まれて9年目といわれている。このようなラクダを *buzūl* という。それから1年たつと、歯がすべて完全に成長した状態になり、このようなラクダは *mukhlifa* と呼ばれた。*jadaliyya* はアルヤマンのジャディーラ (Jadīla) 産の雌ラクダ。

7) 「アルター (ʿarṭā)」は棘のある樹木で、樹皮は皮をなめすのに用いられた。カモシカや牛はその根元に入って熱さを避けて休む習性があった。No.10, 11行参照。

8) 詩人はムッラ族のガイズ (Ghayz) 家のマスハル・ブヌ・アリー・ブヌ・ジャービル (Mashar b. ʿAlī b. Jābir) の娘に求婚し、承諾を得ていた。その娘、つまり今は詩人の妻になっていると思われる女性に誓って、16-19行を詠んでいる。

- に与える)。また、よく料理された肉を安値で (必要とする者にあたえる)⁹⁾。
- 19- 痩せ衰えて腰が曲がった母親が、夜、お守り用の2個の子安貝を架けた乳飲み子に、干乾びた乳房に乳をせがまれ、途方にくれておれば (私は助ける)。
- 20- また、客たちが接待をしてくれる者を求めるときには、私のために、冬季に子に死なれたラクダや、早産したラクダが (彼らのために) 供せられた¹⁰⁾。
- 21- (これらの) 雌ラクダは雄ラクダほどの大型で、私は刀で臄を切ったが、付着した血ははぬぐわず、擦り傷もそのままにしておいた¹¹⁾。
- 22- まるで砂漠の真ん中の休憩所で、マイス製の鞍の上に、(仲間にふるまうために殺したラクダの) 鞍が置かれているようであった¹²⁾。
- 23- 何一つ不足したものはなく、幼子の母は私の顔を見て輝き、安堵した¹³⁾。

9) 明らかに「マイシル (賭け矢) ゲーム」に言及したものである。詩人はイスラーム時代の人で、コーランでこれが禁止されていることは承知していたはずだが、単なる喩えとして慣用句を使ったものであろう。

10) 子を失うとか、早産したラクダは乳の出が抑えられよく太る。そのような肉の豊富なラクダを客に供したと、気前の良さを自慢している。

11) ラクダを屠殺するときは、まず足の臄を切って動けなくしてから、喉を切って刺してとどめを刺した。

12) 「マイス (*mays*)」は「椰子」の1種で、鞍をつくる材料とされた。

13) この1行をアブー・イクリマは伝えていない。19行の次に配置すべきもの。

—(XXXV) アウフ・ブヌ・アルアフワス—

الْعَوْفُ بْنُ الْأَخْوَصِ

まえがき

本名アウフ・ブヌ・ラビーア・ブヌ・ジャアファル(ʿAwf b. Rabīʿa b. Jaʿfar)。詩人の父ラビーアは目が細く「アルアフワス (細目の男) al-ʿAḥwaṣ」 という綽名で呼ばれていたの、この詩人は「細目の男の子(イブン・アルアフワス) Ibn al-ʿAḥwaṣ」といわれた。

父はアーミル・ブヌ・サアサア族と同盟軍を率いた人物で、ジャーヒリーヤ時代3大戦の1つに数えられる「シウブ・ジャバラ (Shiʿb Jabala) の戦い」の指揮者であった。この戦いは、ヒジュラ (622年) より前の570年頃にあった。当時年老いて、睫毛で目が覆われていたラビーアが率いたアーミルおよびアブス連合軍が、タミーム、ズブヤーン、アサドなどよりなる連合軍を敗走させた (『歌の書』10, p.34)。この戦いには、息子アウフも一軍の指揮者として参加している。

アルアンバーリーは、この詩がアルハーリス・ブヌ・カアブ (al-Hārith b. Kaʿb) 家のある男を風刺したものと説明しているが、明らかに誤っている。すなわち、この詩は詩人が属するジャアファル一門のために近親のアブー・バクル・ブヌ・キラーブ (ʿAbū Bakr b. Kilāb) 一門を説得した内容となっている。

ある日、ジャアファル家の者たちが、アブー・バクル家のラビーアという男を捕まえ、縛りあげて侮辱するという事件が起きた。捕らえられた男の兄アルヒサーン (al-Hiṣān) が、弟を解放するように求めたが拒絶された。そこで詩人アウフがラクダ40頭を提供するから和解するように説得にかかり、それを保証するために息子のダアブ (Daʿb) を人質に出すなどと申し出た。これが7行目から最後まで主題をなしている。

序詩の部分には、メッカ巡礼にかかわる注目すべき言及がある。詩人の属するキラーブ族はアフムス (ʿAḥmus, 複数 ḥums) の一員であった。カーバ神殿の周辺に住むクライシュ、フザーア、キナーナ、アーミル・ブヌ・サアサアの部族には巡礼期間中、特別な儀礼が課せられていた。これら以外の者はヒッラ (ḥilla) と呼ばれ、種々の特権が認められていた。本詩4行と5行にヒラーウ山にも巡礼していたとか、生贄を供えたとか、ウマイヤー門が巡礼月入りを決めていたことなどに言及している。これらはイスラームにおける巡礼儀礼と比較すべき問題であろう。

ワーフィル (wāfir) 調、20行。

(XXXV) テキスト

وَقَالَ عَوْفُ بْنُ الْأَحْوَصِ،

- ١- هُدِّمَتِ الْحَيَاضُ فَلَمْ يُغَادِرْ
- ٢- لِحَوْلَةٍ إِذْ هُمْ مَعْنَى وَأَهْلِي
- ٣- فَلَأَيًّا مَــا تَبَيَّنَ رُسُومُ دَارِ
- ٤- وَإِنِّي وَالَّذِي حَجَّتْ قُرَيْشٌ
- ٥- وَشَهْرَ بَنِي أُمَيَّةَ وَالْهَدَايَا
- ٦- أَذُنُكَ مَا تَرَفَّقَ مَاءٌ عَيْنِي
- ٧- أَفُرُّ بِحُكْمِكُمْ مَا دُمْتُ حَيًّا
- ٨- فَلَا تَتَعَوَّجُوا فِي الْحُكْمِ عَمْدًا
- ٩- وَلَا آتِي لَكُمْ مِنْ دُونِ حَقِّي
- ١٠- فَإِنَّكَ وَالْحُكُومَةَ يَا ابْنَ كَلْبٍ
- ١١- خُذُوا دَأْبًا بِمَا أَتَّيْتُ فِيكُمْ
- ١٢- وَلَيْسَ لِسُوقَةٍ فَضْلٌ عَلَيْنَا
- ١٣- فَهَلْ لَكَ فِي بَنِي حُجْرٍ بَنٍ عَمْرٍو
- ١٤- أَوِ الْعَنْقَاءِ ثَعْلَبَةَ بَنٍ عَمْرٍو
- ١٥- وَمَا إِنْ خِلْتُكُمْ مِنْ آلِ نَصْرِ
- ١٦- وَلَكِنْ نِلْتُ مَجْدَ أَبِي وَخَالٍ
- ١٧- أَبُوكَ بُجَيْدٌ وَالْمَرْءُ كَعْبٌ
- ١٨- وَلَكِنْ مَعْشَرٌ مِنْ جِذْمٍ قَيْسٍ
- ١٩- وَقَدْ شَجِيتُ إِنْ أَسْتَمَكَنْتُ مِنْهَا
- ٢٠- فَنَاءُ مُدْرَبٍ أَكْرَهْتُ فِيهَا
- لِحَوْضٍ مِنْ نَصَائِبِهِ إِزَاءُ
- وَأَهْلُكَ سَاكِنُونَ مَعًا رِثَاءُ
- وَمَا أَبْقَى مِنَ الْخَطْبِ الصَّلَاءُ
- مَحَارِمُهُ وَمَا جَمَعَتْ حِرَاءُ
- إِذَا حُبِسَتْ مُضَرَّجَهَا الدِّمَاءُ
- عَلَى إِذَا مِنْ اللَّهِ الْعَفَاءُ
- وَالزَّمُهُ وَإِنْ بُلِغَ الْفَنَاءُ
- كَمَا يَتَعَوَّجُ الْعُودُ السَّرَاءُ
- فَأَبْطَلَهُ كَمَا بَطَلَ الْحِجَاءُ
- عَلَى وَأَنْ تُكْفِنَنِي سَوَاءُ
- فَلَيْسَ لَكُمْ عَلَى دَأْبٍ عِلَاءُ
- وَفِي أَشْيَاعِكُمْ لَكُمْ بَوَاءُ
- ، فَتَعَلَّمَهُ وَأَجْهَلَهُ، وَلَا
- دِمَاءُ الْقَوْمِ لِلْكَلْبِيِّ شِفَاءُ
- مُلُوكًا وَالْمُلُوكُ لَهُمْ غِلَاءُ
- وَكَانَ إِلَيْهِمَا يَنْمِي الْعِلَاءُ
- فَلَمْ تَظْلِمَ بِأَخْذِكَ مَا تَشَاءُ
- عُقُولُهُمُ الْأَبَاعِرُ وَالرِّعَاءُ
- كَمَا يَشْجَى بِمَسْعَرِهِ الشِّوَاءُ
- شُرَاعِيًّا مَقَالِمُهُ ظِمَاءُ

(XXXV) 訳

- 1- 水槽はことごとく壊され、水槽の縁の、バケツで水を注ぐ台となる笠石も、どの水槽にも残っていなかった。
- 2- ハウラとその一家はある土地に住み、私の家族とそなた（ハウラ）の家族¹⁾は向か

1) 彼女の人称が2人称に突如変わっている。

い合ったテントに住んでいた。

- 3- だが今や、住まい跡の面影はほとんど分からなくなり、焚き火²⁾は薪の燃え滓も残していなかった。
- 4- 私はクライシュ族が巡礼した聖地の主、ヒラーウ山が集めた（「巡礼者」または「供え物」）³⁾の主にかけて誓う。
- 5- また、ウマイヤー門の月（すなわち「ズー・アルヒッジャ月」）と、縛られて地面を血で赤く染めた生贄にかけて誓う⁴⁾。
- 6- 私は我が目の涙がきらきらと光っている限り、そなたを決して非難しない⁵⁾。万一違約すれば、神が私を亡き者とされよう。
- 7- 私は命ある限り、あなた方の裁定を認め、たとえ財産を失おうとも、これを受け入れる。
- 8- よって、あなた方は裁定を下すに当たって、(弓の材料となる) サラーウ⁶⁾の木が曲がっているように、故意に曲がったことをしてはならない。
- 9- 私は、あなた方に真実をごまかすつもりはない。さもないれば、賢明さを競い合う議論が空しいように、裁定も空しいものとなろう。
- 10- イブン・カルブよ⁷⁾、お前がわたしに不利な裁定を下すことは、私を殺して経帷子を着せることと同じだ。
- 11- 私がお前たちに加えた損傷の償いとして、我が息子ダアブを人質に引き渡すので受け取るがよい。お前たちのほうにはダアブより高貴な者はいない⁸⁾。
- 12- (われらもお前たちもともに王者ではなく、臣下である) 臣下の中で、我らより上位者は皆無である。お前たちの仲間（すなわち「我ら」）の中に、お前たちが報復するに値する者がいるであろう⁹⁾。
- 13- お前はフジュル・ブヌ・アムル¹⁰⁾ 一門の血筋の者か？ それゆえ、お前は彼を知り、

2) *al-ṣila*「焚き火」はアルハーリス・ブヌ・ヒッリザ (*al-Ḥārith b. Ḥilliza*) のムアッラカ8行に、「恋人の居場所で燃えていた」とある。

3) 「ヒラーウ (*Hirāʾ*)」はメッカから東のターイフにむかう途中、約3マイルのところにある山で、ムハンマドが最初に啓示を受けたところ。この詩は預言者が活動をするより前のものであるが、ヒラーウが聖地として巡礼されていたことを物語っている。この山が「集めた」ものは「巡礼者」ととりたてたいが、*mā* が使われているので、「生贄」のことかも知れない。

4) 解説者らはバヌー・ウマイヤ (*Banū ʿUmayya*) が、クライシュ族の中で巡礼に関して格別の敬意が払われていたとしている。ただ、この一門がウマイヤ・ブヌ・アブド・シャムス (*ʿUmayya b. ʿAbd Shams*) を祖とし、後にウマイヤ朝を開いた一門とは限らない。巡礼月との特別の関係とは、おそらく太陽暦に合わせるために月暦に閏月をいれて、巡礼月を決める権利がウマイヤという人物に与えられ、代々引き継がれていたのであろう。

5) *ʿadhummu-ki* は *lā ʿadhummu-ki* 「私はそなたを非難しない」のことで、誓約における否定詞省略の例。

6) 「サラーウ (*sarāʾ*)」は弓を作る材料とされる樹で、「ナブウ (*nabʾ*)」「シャウハト (*shawḥat*)」などともいわれた。

7) 「イブン・カルブ (*Ibn Kalb*)」がどのような人物か分からないが、紛争の調停に関与した裁定者と思われる。

8) 人質が相手の損害よりはるかに価値のあることを表明している。

9) キラーブ (*Kilāb*) を共通の祖とする、アーミル・ブヌ・サアサア系のジャアファル家とアブー・バクル家はもと血縁による「*shīʿa* (集団)」で、詩句の意味は「報復するのに同等の価値の者がいる」と述べたもの。

10) フジュル・ブヌ・アムル (*Hujr b. ʿAmr*) はイムルウ・ル・カイスの父で、キンダ王。

私は彼を知らないというのか？

- 14- それとも、アルアンカーウ、すなわち、サアラバ・ブヌ・アムルの血筋の者か？ これらの人々の血は、狂犬病の治療薬になるのだが¹¹⁾。
- 15- 私はお前たちがナスル家の王たちだと思っていない。王たちへの血債は高価だ¹²⁾。
- 16- しかしながら、私は父方と母方の叔父から栄光を得て、2人に並ぶ高い地位に上った。
- 17- お前の父 (父祖) はブジャイドとカアブ¹³⁾ という男だ。お前は思うままに振る舞ったが、(お前の父祖のように) 不当なことはしなかった。
- 18- しかし、我々はカイス¹⁴⁾ を祖とする一族であり、血債が課せられればラクダや奴隷で支払う (よって、不当な報復は避けよ)。
- 19- 戦争が起こった。焼肉が火搔き棒で串刺されるように、もし私が戦いの主導権を握れば、戦いを串刺しし(、勝利をおさめるであろう)。
- 20- (私は) 柄の節々が敵の血に飢えている穂先を差し込んだ槍を(、携えて戦闘に臨む)¹⁵⁾。

11) 「アルアンカーウ (al-ʿAnqāʾ)」はサラバ・ブヌ・アムル・ブヌ・アーミルの綽名で、首が長かったためにつけられた。ガッサーン王。アラブは王侯貴族の血を飲むと狂犬病に効くと信じていたようだ。

12) 「ナスル (Naṣr)」はラフム朝の王たちの祖先のイブン・ラビーア・ブヌ・アムルを指す。「血債」はアラブの自由人の場合ラクダ100頭、王は1,000頭と前者の10倍。No.11「まえがき」参照。

13) 「ブジャイド (Bujayyid)」は「ビジャーダ (ラクダや羊の毛で織った着物 *bijād*)」の縮小形であるが、この人物名はキラブ家の祖先に見当たらない。逆に、カアブ (Kaʿb) は何人もいて特定できない。

14) 「カイス (Qays)」はカイス・アイラーンというハワージン系の大部族の祖。アーミル・ブヌ・サアサアもこれに属する部族。

15) この2行は脅迫する言辞のようだが、本意がよく分からない。*shurāʾī*「穂先」は「穂先作りの名人シュラーウ (Shurāʾ) が作った穂先」とある。